
透析施設の看護スタッフのバーンアウト状態において「脱人格化」は最も強い負のインパクトを有する

医療法人衆和会 長崎腎病院

○上谷しのぶ 丸山祐子 河津多代 久原拓哉 澤瀬健次
原田孝司 船越 哲

【目的】

透析専門病院における看護スタッフのバーンアウト状況と、職業キャリア成熟度の関連を調査する。

【方法】

当院の看護師71名を対象に、マズラック・バーンアウト尺度を用いてバーンアウト状況を評価し、併せて職業キャリア成熟度との関連を調査した。

【結果】

バーンアウトの「情緒的消耗感」の因子では「自律性」に弱い負の相関を認めた。「脱人格化」の因子では「自律性」に負の相関、「関心性」、「計画性」に弱い負の相関を認めた。「個人的達成感の減退」の因子については、3つ全ての尺度で関連は認められなかった。

【考察】

職業成熟度が高くなるほど、またその中でも特に「自律性」が高い者ほど、バーンアウトの「脱人格化」が改善する傾向がみられた。さらに「脱人格化」は関心性・自律性・計画性すべての尺度で負の相関を認めることより、ストレス反応としての脱人格化行動は、医療現場において多くの職業性成熟尺度に影響を受けやすく、最も警戒すべき危険な状況と考える。